

第 243 回昭和の森自然観察会

早春の芽立つ植物

盛一 昭代 (千葉市)

日 時：2012 年 3 月 11 日 (日) 13～15 時 天候：晴れ

参加者：16 名 (大人 13 名 子ども 3 名) 指導員 13 名

担当指導員：栗山忠俊、佐藤一枝、盛一昭代

3 月の観察会は、冬芽や土壤や啓蟄の話など、地味なテーマが多いが、タツ年に因んで「芽立つ植物」と決定。ところが、立春を過ぎても三寒四温の歩みが遅く、すっきりと休眠打破される気配がない。それならば固い冬芽を解剖して、内部を覗いてしまおうと、協議会の備品であるファーブル顕微鏡 5 台を用意した。

参加者が手に手にケータイを持ち、写メして検索すると解説が得られる時代だから、植物図鑑のようなガイドはいらない。軽くウォーキングしながら、五感を刺激し、季節の移ろいに気づき、自然の恩恵に感謝出来たら、幸せである。しかし、それぞれが好みの場所で写メすると時間におかまいなくなる。早く顕微鏡で別世界をお見せしたいのに・・・。

展望園の石テーブルに班毎に集まり、持参したツバキ、クロモジ、ニワトコ、ハクウンボク等の芽鱗を剥ぎ取り、カマボコ板の上で切って、爪楊枝で押さえて覗くと、目からウロコが落ちたひと時だった。

軽いスプリングコートの内側に長い毛の束をしのばせていたヒュウガミズキ。ベトベトなコーティングの内側にさらに毛皮を着込んでいたトチノキ。ヌードでそ知らぬ顔のムラサキシキブはビロードのように密集した産毛をしていた。

アオキは芽の中に枝葉と花を内蔵している混芽だった。ソメイヨシノは丸みを帯びた鱗芽の中に 3 つも花束を用意していた。もうしっかりと低温を体感したので、室内で温めれば、春化させることも出来るだろうが、春爛漫を待ちわびる方が風流であろう。

早春の梅林は今年も忘れず馥郁たる香りを届けてくれた。

